

研究専攻（専門領域）		文化構造研究専攻		学籍番号	L1010
氏名	清野 真南海	ローマ字	KIYONO Manami	国籍 (留学生)	
修士学位 論文名 特定課題研究名	退屈の構造				
提出年月日	2007年8月20日	指導教員	高橋 克也		
体裁 (論文)	45頁（1頁文字数1680字）	言語	日本語		
別冊添付資料等					
キーワード	退屈 カミュ シーシュポス 不条理				
<p>退屈は難しい。退屈を他の言葉に置き換えることも、退屈をやりすごすことも難しい。ノルウェーの哲学者ラース・スヴェンセンは著書『退屈の小さな哲学』のなかで、退屈は危険を冒してでも取り組まねばならない「偉大な問いかけ」の一つであり、それを分析することは「僕たちが存在する条件に関わる根源的な何かを明らかにしてくれる」としている。退屈とは何か。退屈の正体を知れば、体が溶け出しそうな退屈も乗り越えることができるだろうか。</p> <p>第一章では、退屈は「現代に特有な病」とするスヴェンセンの説を受け、『創世記』の解釈から始めて「退屈」という概念の時代による変化を追う。「退屈」の語源はラテン語の <i>acedia</i> で、これはルネサンス期まで教会関係者の言葉であり、修行中の僧侶たちにとって <i>acedia</i> に陥ることは神を冒瀆する最大の罪であった。聖書を前に気が散るということは、神に欠陥があると言っているようなもの、というのが理由である。ルネサンス期以降はメランコリーがその地位を占めるようになったが、<i>acedia</i> が精神的なものであるのに対して、メランコリーは体内分泌の問題とされている。17世紀にはパスカルが神なき人間の悲惨さを退屈から語っている。カントは退屈をその概念においてではなく、時間経験のあり方として観察している。二人の哲学者について考察した後、現代の退屈へ。現代の退屈は経験の乏しさや、ロマン主義以降の自己中心主義が原因と考えられていることがわかる。これらを踏まえ、退屈とは、人が時間に閉じ込められていることではないか、と考えた。</p> <p>第二章では「時間に閉じ込められている」を反復と解釈し、目的のない反復を描いた神話を題材に、時間をいかに生きるかについて考察する。ギリシア神話に登場するシーシュポスは、運んでも必ず転がり落ちる岩を山頂まで運ぶ罰に科せられている。果たされない責苦を負った物語である。ユング派の臨床心理学者はこれを分析し、人生の本質は反復であり、あきらめないでいることに他の人が意味を与えてくれると解釈した。しかし、他人に与えられる意味など必要だろうか？これと対照的なのが、カミュの解釈である。アルベール・カミュは彼の不条理に関する試論において、シーシュポスを不条理の英雄と呼ぶ。不条理とは世界と人間との対立から生まれる定義しえないものであり、行き着く先のない時間の中に閉じ込められていることは不条理の最たるものである。この不条理の中で、シーシュポスは未来にいたずらな希望を抱かず、今なさねばならないことを淡々と行う。「自分こそが自分の日々を支配するものである」と心得ているのである。このカミュの思想にはニーチェの「永劫回帰」が透けて見えるが、それではカミュは永劫回帰を是認することになるのだろうか。現在という時間を俯瞰するかのようなニーチェの視点に比べ、カミュのそれはより現在に忠実であり、両者の間には違いがあると結論づけてよいと思われる。</p>					